

# モーターヘッド

MOTORHEAD  
San-ei shobo  
1050 JPY  
21

4X4  
ERECTION

特集

勃つ4駆。

Kibbetech Bugatti Max  
The Check Shop Raptor Prerunner  
BRABUS G-Class x GLE850  
STARTECH Range Rover x Bentayga  
Custom SUV Trends  
and so on...



NÜRBURGRING 24.

“グリーンヘル”のリアリティ。

ランニングコストを含めて日本での使い勝手に優れるG350ブルーテック。純正フォルムの存在感だけで充分に通じるGクラスならではの、ボディまわりはG63AMG純正のバンパーやオーバーフェンダーへとアップグレードさせたにとどまる。その上で、足もとにはAGIO PRECISIONE KTRを。前後とも10.5J×22インチ、タイヤサイズ305/40R22でドモンビヤだ。タイヤ銘柄はヨコハマタイヤの「PARADA Spec-X」が装着されていた。



装着ホイールはAGIO PRECISIONE KTRの22インチ。レンジローバースポーツのフォルムと見事に調和する。この個性、ボディまわりは純正のオートバイオグラフィーだが、エアサスコンローラーで車高を落とした上でタイヤ&ホイールを設定。極限までクリアランスを詰めることで、前後とも10.5Jで、305/35R22というためのタイヤを履かせることに成功させた。タイヤ銘柄はピレリ・スコーピオンZEROで、走りも文句なしである。

純正エアロで絶妙なアップグレード。

オートバイオグラフィーの存在感、際立つ。



G63用フロントバンパー&オーバーフェンダー  
AGIO PRECISIONE KTR: 10.5J×22  
PARADA Spec-X: 305/40R22



STARTECHエアサスコンローラー  
AGIO PRECISIONE KTR: 10.5J×22  
ピレリ・スコーピオンZERO: 305/35R22

# EURO PRECISION

Text: 中三川大地 Daichi Nakamigawa  
Photo: 小林邦寿 Kunihisa Kobayashi

いつも手を変え品を変え、センス抜群のコーディネート提案するECスペックの、その妙技を痛感する2台である。昔ながらの無骨な姿カタチを貫くGクラスと、英国仕立ての風格にスポーツ路線を取り入れたレンジローバー・スポーツ。ともに日本の公道ではオーバースペックともいえる2台だが、それをサラリと普段使いする人は日増しに増え、都心部ではすっかり定着した。ECスペックは、固有の世界観を崩さない純正風情ながら、決して没個性ではない、見る人が見れば解るさりげない差別化を図った。

Gクラスは、G350ブルーテック（右ハンドル）で、まさに日本での使い勝手に優れたモデルだ。G63AMG用のフロントバンパー&オーバーフェンダーを用いて、さりげなく引き締める。レンジのほうは上級モデルのオートバイオグラフィーであるがゆえ、ボディ

まわりはあえてそのままに。キモは足の設え方にある。スターテック製のエアサスコンローラーで乗り味を犠牲にしない範囲で車高を落とし、クリアランスにあわせてタイヤ&ホイールを選んだ。一般的には幅285程度が妥当なところ、思い切って前後とも305/35の22インチに。インナーフェンダーとは2ミリ程度のクリアランスという位置関係が、絶妙なセッティング力を物語る。遠目から見ると、そのパツパツ感がカッコいい。

なお、両車とも選ばれたホイールはAGIO PRECISIONE KTR。直線的なクルマのスタイリングに、スクリュウのような動きを持たせた表情が見事に溶け込んでいる。この2台、都心のネオンから荒野まで場所を選ばず似合う。まるで自分の身体に完璧に合わせてオートクチュールした、どこへでも着ている一流ジャケットのような存在である。j1

EC.SPEC  
G350 BlueTEC  
&  
RANGE ROVER  
SPORT AUTOBIOGRAPHY

# HYPER FORGED X6M

HYPER FORGED HF-C10  
SIZE 7.5J×19～14J×22  
PRICE ¥127,000～¥322,000

全身黒づくめの中に  
キラリと光るセンス。



フロントまわりはすべて黒で統一。ボルシュティナーのカーボンエアロが装着されているが、そのカーボン地まで塗装した。旧モデルを旧く見せないためのひとつのコツだという。

Text : 中三川大地 Daichi Nakamigawa  
Photo : 小林邦寿 Kunihisa Kobayashi

の全身黒づくめのX6 M。すでに旧型となったE71型なのに、とびきり新鮮な印象を感じさせるのには理由がある。作り手であるECスペックのコーディネイトと、足もとを支えるホイールに答えが隠されている。基本、グリルなど純正にあるメッキ系の部分はすべてブラックアウト。目立たないようボルシュティナーのエアロパーツが装着されるが、つい見せびらがたくなるカーボン地まで塗装してしまうほどの凝りようだ。そのうえでホイールも黒。通をも唸らせる鍛造感あふれるデザイン性と、そして鍛造製法ゆえの強さを併せ持つ国産ブランド「ハイパーフォージド」の定番にして、ロングセラーを続けるHF-C10だ。端正な10本のスポークは車種を問わず似合う普遍性が魅力だが、程よくローダウンされたX6 Mへと組み合わせられたそれは、まるでレーシングホイールのような。ここでコーディネイトのキモとなるのが、ピラスポルトである。リムやディスクをマットブラックで沈めつつ、ピラスポルトだけあえてクロームを残す。たったこれだけで、重くなりがちな全身黒づくめコーデが、ぐっと軽やかになるから不思議だ。軽やかといえば走りの感触もそう。スポーツタイヤ[コンチー・スポーツコンタクト6]を完璧に履きこなす。フロント295/30、リヤ335/25という極太さとも相まって、その走りはもはやSUV (SAV) というよりも、ピュアスポーツカーのようである。』

# POWER KICKS

装着されるホイールはハイパーフォージド製のHF-C10。フロント10.0J、リヤ11.5Jの22インチとなる。端正な10本スポークは主張しすぎずクルマをきっちりと支えている。